

一 般 演 題 抄 錄

## 18. 原因不明の発熱を主訴に当科に入院

### した178例の解析

曾野弘士 有山洋二 榎本 寛  
米川 智 生駒真也 嶋田高広  
宮里 肇 船内正憲 堀内 篤

近畿大学医学部第3内科学教室

#### 目 的

発熱は日常よくみられる症状の一つであるが、その原因は多彩で、一般臨床検査で確定できないことも多い。我々は、近畿大学第3内科学教室開設以来、外来診療で確定診断できなかった発熱患者の内、FUO 症例（その原因が一般臨床検査で診断できずに、38℃を越える発熱が3週間続いた症例）について解析し、併せて非 FUO 症例についても検討した。

#### 対象患者

対象は発熱患者178例で、男92例、女86例、平均年齢46.6歳であった。FUO 群は男22例、女23例の計45例、平均年齢40.0歳、非 FUO 群は男70例、女63例の計133例、平均47.9歳であった。

#### 結果および考察

- ① 原因疾患：FUO 群では、感染症36%、悪性腫瘍20%、膠原病11%、その他4%で、29%は確定診断のつかないまま退院した。非 FUO 群では、FUO 群に比べて感染症が多く(49%)、悪性腫瘍は少なかった(11%)。その他の疾患(16%)には心身症やアレルギー疾患が含まれていた。
- ② 年齢分布：年齢別に症例数および原因疾患の割合をみると、FUO 群では、いずれの年齢層においても感染症の頻度が高く、膠原病は15—45歳で20%を占めたが、46歳以降はみられなくなる反面、悪性腫瘍が増加し、60歳以降では感染症と併せて、2大原因疾患となっ

ていた。非 FUO 群では、FUO 群と同様の傾向を認めたが、30歳以下の症例が多く、特に心身症が多かった。

- ③ 各疾患群の内訳：感染症では、FUO 群では真菌および原虫感染症が多かった(43%)のに対し、非 FUO 群では細菌感染症が多かった(57%)。悪性腫瘍では、FUO 群、非 FUO 群いずれも、血液疾患が多かった(それぞれ55%、71%)。膠原病では、いずれの群も一定の傾向は認められなかった。
  - ④ 検査所見の異常：感染症では、CRP 陽性率が高く(87%)、白血球増加は少なかった(14%)。依然原因不明の症例でも、これと同様の傾向を示したことは興味深い。血沈は膠原病と依然不明の症例で1時間値100mmを越える亢進がみられた。
  - ⑤ 確定診断できなかった症例の随伴症状：確定診断できなかった FUO 症例の半数で肝腫大、リンパ節腫脹、皮疹等を認めたが、残りの半数では明らかな随伴症状を認めなかった。
  - ⑥ 確定診断できなかった症例の経過：確定診断できなかった症例の24%で、発熱は自然に消失したが、その他の症例では、副腎皮質ステロイド剤の投与により解熱し、投与を減量中止しても再発をみないものがほとんどであり、ウィルス感染症が一部には含まれていた可能性が考えられた。
- 以上、今後の発熱患者を診療する上で、有意義な資料と考えられた。